〈青森県史〉の窓 145

上十三を象徴する二つの湖

中園 裕
（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

小川原湖でヨットや湖水浴を楽しむ人々。
背後に「象の檻」と呼ばれた米軍姉沼通信所（昨年撤去）が見える
＝1980年代後半・青森県史編さん資料

上北郡は青森県東部に位置し、広大な面積を誇る地域である。1878（明治11）年の郡区町村編制法の施行により、北郡が上北郡と下北郡に分かれて成立した。首都東京に近い南側が上北郡で、遠い北側が下北郡となった。上北郡は上北ないし上十三（上北郡と十和田市と三沢市）と称することもある。また下北半島にある横浜町と六ヶ所村は、行政的には上北郡に属する。当然、上十三地域に含まれる。

上十三地域には十和田湖と小川原湖という二つの大きな湖がある。十和田湖は山中にあるカルデラ湖で、かつては魚がすめなかった。しかし奥入瀬渓流や八甲田連峰、蔦温泉などとともに十和田国立公園（現在は十和田八幡平国立公園）に指定され、景勝地としての歴史を歩んできた。公園周辺の十和田湖町（現十和田市）には森林や牧場が多く、十和田市や七戸町には田畑や牧場が広がっている。

これに対し小川原湖は海岸近くの平地にあり、汽水湖だが水産物の宝庫である。しかし湖周辺の三沢市には米軍の基地や射爆撃場があり、百石町（現おいらせ町）には工業地帯が形成されている。そして六ヶ所村には核燃施設が林立し、自衛隊の対空射場なども存在する。戦後急速に進んだ開発の歴史を背負ってきているのである。

開発適地の条件は、海に近く平野が広がり、工業用水の確保が容易で、集落や人口は少なく、農業生産の低い土地が広くあることだった。小川原湖周辺は湖自体が平野に存在し、周辺の集落や人口は少ない。ヤマセの常襲地帯であるため、水田耕作には不向きな土地だった。このためむつ小川原開発の好適地と見なされた。そして工業用水を確保するため、汽水湖である小川原湖の淡水化が計画された。

2度の石油危機のため、むつ小川原開発は当初の計画通り実現せず、代わって核燃開発が導入され、小川原湖の淡水化は実現されなかった。現在の小川原湖は、汽水湖としてワカサギやシジミ、天然のウナギなど、豊富な水産物を有する「宝湖」と称されている。

他方、景勝地の象徴である十和田湖は、昨今湖以上に人気の高い奥入瀬渓流の源泉である。渓流は奥入瀬川の上流部分であり、川には毎年サケが遡上する。奥入瀬川の水は立石、十和田、法量、蔦の各水力発電所の水源であり、人工河川の稲生川や他の水路に流れ込んで、十和田市や周辺町村の田畑を潤す農業用水となる。さらに上十三地域に住む人々の飲料水でもある。十和田湖は「命の水」を育む大切な湖なのである。

十和田湖と小川原湖は非常に対照的で、湖を取り巻く環境や歴史も相当に異なる。しかし、湖の存在と果たす役割は非常に共通性が多く、何よりも上十三地域にとってなくてはならない存在である。

景勝地と開発地は相いれない存在である。農山村が広がる地域と工業地帯は、相いれない要素を備えている。しかし、こうした価値観や特質が異なり、場合によっては対立し合う要素が、実は融合し違和感なく存在しているところに上十三地域の特徴があると思う。